感染症とグローバル化

関西大学　社会安全学部　　小澤　守

昨今の新型コロナウイルスによる肺炎蔓延は，どうやらヨーロッパにも拡大し，3月12日，WHOはパンデミックと断定，各国に拡大防止について強い注意勧告を行った．この原稿を執筆している現在の感染者数は世界全体で16万人超，死者数は6,000人を超えている．新型コロナウイルスについては今しばらく日数がたってから改めて述べるとして，今回は感染症の時間と空間にまたがる広がり方について述べよう．

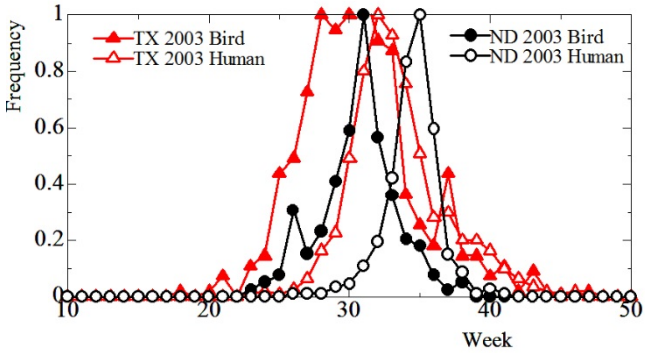
下図に示したのは，米国において毎年のごとく発生する西ナイルウイルスの時間変化[1]をテキサス州TX，ノースダコタ州NDの死亡した鳥の個体数と鳥から人へ感染した人数を，それぞれ最大数で割って規格化したものである．したがって各グラフの最大値は１となっている．横軸は1月1日からの日数である．西ナイルウイルスは蚊を媒介として鳥，そして人が感染するもので，ルイジアナやフロリダにやってきた渡り鳥が，蚊を媒介として感染し，北西方面に再び帰っていく途中の過程をあらわしている．第20週目あたりで，テキサスで感染個体数が増加し，おおよそ30週目ごろにピークとなる．テキサスではおおよそ５週間程度ずれて人への感染が進行する．同じくノースダコタではテキサスから5週間程度遅れて感染個体数の増加が始まり，やはり5週間程度遅れて人への感染が増加している．

このようにテキサスとノースダコタで５週間程度ずれているのは，渡り鳥の移動によるものであり，鳥から人，そしておそらく人から人への感染にも遅れが存在するのは，米国市民の感染症に対する認識や衛生状況，人口密度などが影響しているのだろう．

このように感染症は必ず時間的に発展し，その発展の速さは接触のために必要な時間と発症に必要な時間に依存し，西ナイルウイルスでは3週間から５週間程度の時定数を持つ．この時定数が重要で，対策もこの時定数を考慮して実施するべきであろう．もう一つ大切なことは，この図のようにある程度時間がたてば必ず収束することを忘れてはならない．

第１次世界大戦中の1918年～1919年に米国のヨーロッパへの参戦によってばら撒かれ，スペイン風邪ともいわれた新型インフルエンザの蔓延で，世界中で５億人が感染し，2000万人から4500万人が死亡したという[2]．我が国では45万人が死亡した．この感染症が世界中に拡散するのには，船舶による移動であったため数ヶ月程度必要であった．海外との人，もの，情報の交流が極めて盛んな現在では，数日で世界中を駆け巡ることになる．空港などでの聞き取りや体温測定などで海外からの侵入をくい止めるのは至難の業であり，都市に住むものが，全く周囲と没交渉で生活することもできない．今国会で新型インフルエンザ等対策特別措置法の改正案が提出され，新型コロナウイルスに対しても緊急事態措置が取れるようになったが，具体的にどのような措置をどのような時期にとれば被害（感染者数，死者数のみならず我が国の経済や産業も含めて）が最も少なく，押さえこめるか，明確な基準を作ることは容易ではない．多くの企業においてはすでにオフィス勤務の人たちにはTeleworkと称して在宅勤務が行われているようである．この言葉そのものは南カリフォル

ニア大学にいたJ. M. Nillesの造語だそうで，基本はオフィスで働くことであり，家で仕事をしてもかまわないとの許可を出したことから使い始めたという[3]．Teleとは離れていることであり，離れていれば，ごった返す電車の中でもライブハウスでも，またネットカフェでも，コンピュータを用いて，各企業の用意するサイトにアクセスして仕事をすればよいのである．となれば，せっかくの感染防止がなし崩しとなるのは必定である．故に，どちらかといえばWork from homeと言って，仕事の場所を家に限定するのが必要であろう．

学校も閉鎖，図書館も美術館も閉鎖，学会も音楽会もほとんどすべてが中止・延期，閉鎖が長期にわたって続けば，経済的，社会的そして教育的損失は計り知れないが，働き方改革もあいまって，今一度，ゆっくりとした時間を取り戻すいい機会かもしれない．観客のいない大相撲を観戦し，久しぶりに家族との団欒や読み残した読書に向かうのもよろしかろう．とはいえ，あちこちにお願いしている原稿がなかなか集まらず，会社に電話をかけてもつながらず，一向に仕事がはかどらない．困った．

[1] 米国CDCのデータによる．
[2] 速水融，日本を襲ったスペインインフルエンザ，藤原書店（2006）．
[3] https://shigoto-ba.com/archives/1360#Telework，アクセス2020.3.13.